

市史だより

F u k u o k a

21

史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]

Spring + Summer 2015

TAKE FREE

四十八溪ウォーク

警固・赤坂・桜坂

特集

contents

- 08 市史編さん室ピックアップ
- 09 部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）
- 10 「新修 福岡市史」ナナメ読み
- 11 連載コラム「タイムマシンでとなりの駅へ」
- 12 連載コラム「福岡市史への歩み」

特集

四十八溪ウオーク

警固・赤坂・桜坂

周囲を幹線道路に
囲まれた一带は、
緑が残る坂の町。
この地に住む
人々の営みとは――。

文＝市史編さん室



福岡市の中心を横切るけやき通りから南側の
路地を覗くと、そこには突然上り坂が姿を現し
ます。この坂道を歩くと、思ったよりも勾配がき
つく、アップダウンを繰り返します。狭く入り組
んだ道は、住宅に囲まれまるで迷路のようですが、
周辺は緑豊かで、静かな空気に包まれています。

警固・赤坂・桜坂にまたがるこの小高い一帯は、
中央区で最も高い山である鴻巣山から北に延び
た丘陵（鴻巣山丘陵）の北端に位置し、平野を大
きく東西に分けています（図1）。南公園から警固
や赤坂あたりまでは、この丘陵が細く突き出た
先端に当たるため、狭い範囲に尾根と谷が入り
組んだ、高低差の多い地形になっています。

周辺には近年まで、「地藏谷」「駿河谷」「茶園

谷」「馬屋谷」「井原ヶ谷」など、「谷」と名のつく
地名が十数カ所あり、かつては「四十八溪」と
言い表されたほどでした（『筑前志』）。標高こそさ
ほど高くはありませんが、急激な高低差が続く
特徴的な地形が、人々に「谷」という印象を強く
残したのでしょうか。

今回は、このような特徴的な地形を背景にした、
人々の営みを見ていきたいと思います。

壺がめぐるE

近世中期に編さんされた『筑前国続風土記』
には、「警固村の上に丸山と云山あり、此山のま
はりに、経一尺はかりの壺、其数二三百埋めり。
つらなりてめくれり。」という記述があります。

壺は素焼きとのこと。編者の貝原益軒は、この
山を「古塚」と考えていました。確かに、素焼き
の壺、つまりは埴輪がぐるりと並んだ古墳を思
わせる描写です。しかしその後、「丸山」の場所は
分からなくなっていました。

「丸山」に似た地名には「丸尾山」があります。
あとから紹介する福岡藩士の星野助右衛門実宣
の墓が、かつてこの「丸尾山」にあり（『筑前国続
風土記拾遺』、昭和四（一九二九）年発行の『福
岡県碑誌』は、墓の位置を「警固の山中に在り。
今の練堀町停留所と古小鳥の中間に位置したり
といふ」と記録しています。これを参考にすれば、
おおむね筑紫女学園中学・高等学校（中央区警固
二丁目）に向かって延びる丘陵のどこかが「丸尾

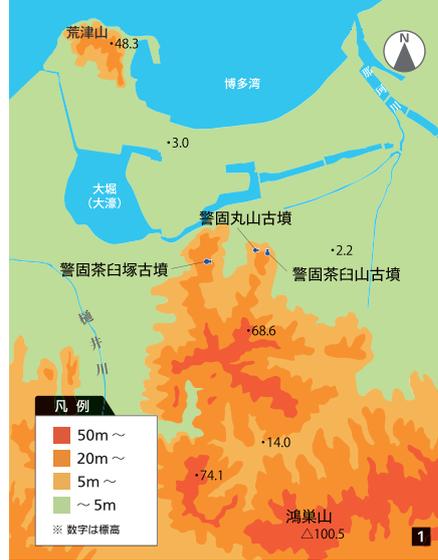


2 地蔵谷と桜ヶ峰を繋いでいた階段。写真の右上が桜ヶ峰神社境内の方向だが、現在の階段は途中で切れており、使うことはできない

3 「谷」の名がつく地域の現在
[右] 地蔵谷
[中央] 駿河谷
[左] 茶園谷

4 筑紫女学園校内の板碑とその拓本の一部

5 花押が記された陶磁器
[右] 警固丸山古墳出土白磁皿
(口径約 9.9 cm)
[左] 博多遺跡群出土高台付皿
(口径約 10.7 cm)



1 明治33年測量の2万分の1地形図を基にした、鴻巣山丘陵一帯の地形図。丘陵の北側にある高地(68.6m地点)が現在の南公園付近に当たる。古墳は海に向かって突き出た丘陵の先に位置している。周囲からよく見えるこの場所は、豪族たちの権威を示すには最適な場所だったろう

山」に当たりそうです。

近年、その筑紫女学園の校内で古墳が見つかりました。墳丘はなくなっていますが、周りをめぐる溝の痕跡や、墳丘を覆っていた葺石、古墳の時期を推測させる埴輪片が発掘されました。調査の結果、五世紀後半から末頃の帆立貝の形に似た前方後円墳と考えられています(警固丸山古墳)。また未調査ながら、校地の東側に隣接する丘にも、前方後円墳の一部が残っていることが知られています(警固茶臼山古墳)。どうやら「壺がめぐる山」はこの辺りにあったと考えると良いようです。さらにそれより西方向、「地蔵谷」と「駿河谷」に挟まれた丘にも、前方後円墳が部分的に残っていることが分かりました(警固茶臼塚古墳/未調査)。いずれの古墳も、福岡市域では大型といえる規模を誇っています。

気にかかるのはその立地です。近世では、この一帯は那珂郡・早良郡の郡境のすぐそばに当たります。近世の郡境が必ずしもそのまま古代まで遡るわけではありませんが、平野を東西に分けるこの地域の丘陵は、不自然な区切りではありません。

大化の改新以後、朝廷は地方の豪族たちの支配領域を再編し、新たな行政単位の「評」(郡の前身)をつくっていききました。郡境となるこの地域に古墳を営んでいた豪族は、那珂・早良両郡域に残る他の古墳をつくった豪族たちとどのような

関係にあったのか、そして朝廷とどのような関係をもち、結果どちらの評(郡)に編入されていたのか、今後の研究の進展に期待がかかります。また、ここは鴻臚館の後背地にも当たります。古墳は鴻臚館前史を語るものともなりそうです。「壺がめぐる山」は、地域の古代史を考える際の、新たな材料をもたらし続けています。

● 弔いの場を求めて

警固丸山古墳の調査では、古代の終わりから中世初め頃の土墳墓も確認されています。この土墳墓からは外底部に墨で花押が書かれた、十二〜十三世紀頃のものと思われる白磁皿(図5右)が出土しました。これとよく似た花押が書かれた陶磁器(図5左)が、博多遺跡群からも見つかっています。

また、筑紫女学園の校内には、明応二(二四九三年)五月二日の銘がある供養板碑(図4)が保存されています。元の位置からは動かされているようですが、碑には六七名もの法名が刻まれており、銘文から「永堅」という人物が施主となり、一周忌供養のために作られたことが分かります。詳しい作成の経緯は分かっていますが、前年である明応元年五月には、箱崎で少弐政資と大内政弘の間で合戦が行われ、多数の死者を出したと伝えられており、一説では、その時の死者を供養したものでないかとも指摘されています。

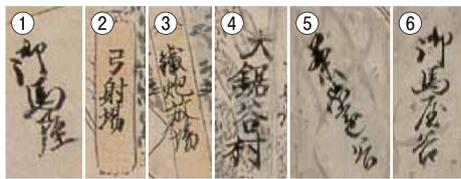
小高いこの一帯は、人々を静かに弔うのにふさわしい場所と考えられていたのでしょう。出土した品や板碑の内容から考えると、中世にこの付近に埋葬された人々の中には、博多や箱崎と関わりがあった人物が少なからずいたのかもしれない。

文武百般の町

近世になり、黒田長政が筑前へ入国すると、福岡城が築かれ、町が整備されました。福岡城とその周辺を描いた絵図(図6)を見ると、町は城の北側に整然と描かれています。一方の南側はというと、城の出入口である追廻御門付近から南の丘陵一帯にかけて、地形に沿うように「御馬屋」「弓射場」「鉄砲放場」といった施設と、藩士の居住地が見えます。また、近世後期に編さんされた『筑前国続風土記附録』によれば、年代は不明ですが、大鋸谷村の「いばらが谷(井原ヶ谷)」には火薬を作る小屋があった、とあります。さらに藩士の名簿である分限帳には、城の南に住む藩士の役職として「石火矢役」「御薬込(御火薬込)」「射術方」「御馬方」が見え、また「鷹匠」や「餌差」も確認できます。この一帯にこれらの施設と、関連する役職にある藩士の住居が多く集まっていたのはなぜでしょうか。

まず、このような施設を建てるためには、ある程度の広さの土地が必要です。次に、鉄砲や火薬

6 『福岡御城下絵図』(元禄12(1699)年作成)の一部。堀に囲まれた空白地は福岡城。北側には町が整備されている。南にある追廻御門を出ると、すぐに「御馬屋」(①)がある。その西に広がる南北に長い区画は馬場。丘陵の麓には警固村があり、それを取り囲むように水田が描かれている。この水田は明治以降も残った

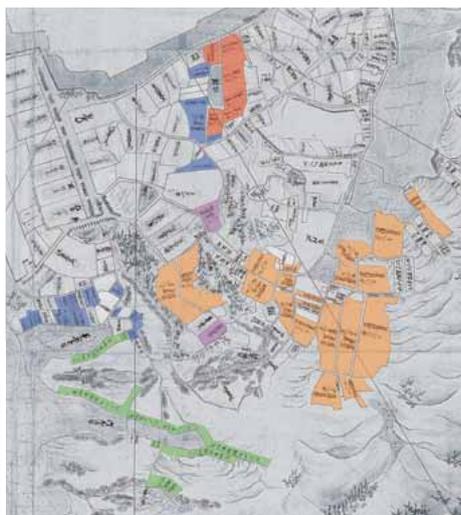


[左上] 絵図内には施設や谷の名前が見える

- ① 御馬屋
- ② 弓射場
- ③ 鐵炮(鉄砲)放場
- ④ 大鋸谷村
- ⑤ 茶園(園)谷
- ⑥ 御馬屋谷

[左下] 携わる役職ごとに居住地域が分かれている

凡例	
■	弓屋敷
■	馬取屋敷
■	鷹匠・餌差・犬引屋敷
■	御傍筒屋敷(鉄砲)
■	御花作屋敷



などは町中で取り扱うには危険が伴います。こういった条件を考慮した結果、城から近く、十分な土地が確保でき、また安全面にも配慮できるこの一帯が選ばれたと考えられます。それにより、関係する役職の藩士たちの居住地が、施設の近くに集中して置かれたのではないのでしょうか。鷹匠や餌差についても、鷹の飼育や調教を考えたとき、町中よりも山の方が、環境の面で適していたのでしょうか。

近世のこの一帯は、特定の職能に携わる藩士が集められた場所だったようです。ほかにも近世を通してみると、分間方(測量を担当する役職)・学問所指南役・小鼓方・御茶道・御花作り・書家など、やはり専門的な役職の藩士たちが居住していました。

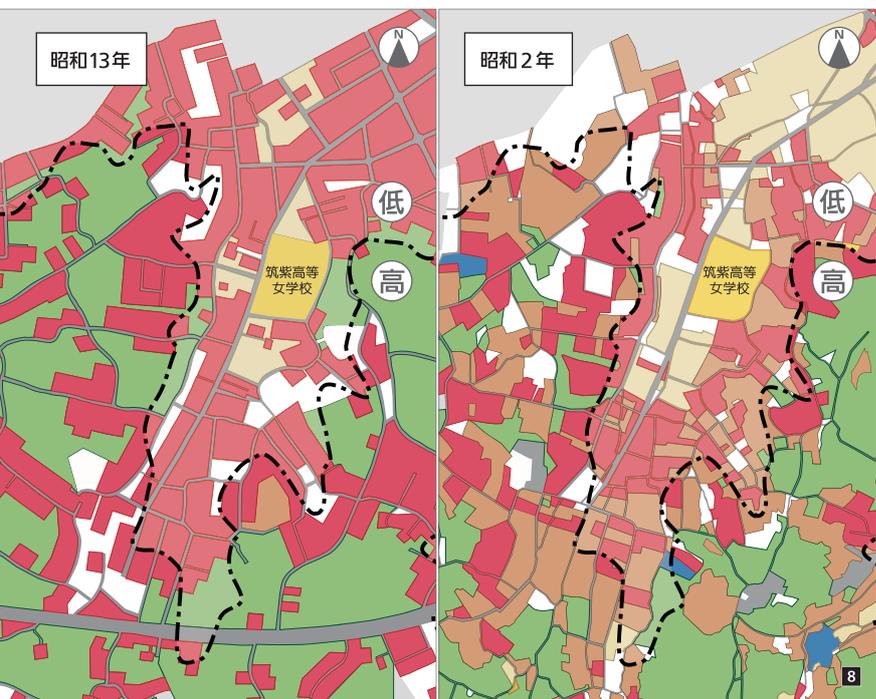
知られざる「谷」の才賢

それでは、具体的にこの地域に関わりのあった藩士を、二名ほど挙げてみましょう。

まずは分間方の星野助右衛門実宣です。星野は、江戸で和算家の横川元悦(げんえつ)に算学を学びました。その後、三代藩主黒田光之(みつゆき)に仕え、元禄期には分間方総裁として『元禄国絵図』の作成に携わります。『元禄国絵図』と、その作成の手法は、福岡藩におけるその後の絵図類の作成に、多大な影響を与えました。先ほど紹介した「丸尾山」

にあつたという墓碑は、星野の死後九〇年以上を経た寛政九（一七九七）年に、福岡藩の算学者たちによって再建されており、後世への影響の大きさが見て取れます。

また、「古大鋸谷」には、学者の井土周磐が住んでいました。福岡藩の学者といえば、貝原益軒や亀井南冥などが有名ですが、井土家もまた、周磐の祖父・父ともに学問で福岡藩に仕えた一家でした。周磐は養子として井土家を相続した人物ですが、学問に長け、文化三（一八〇六）年には修猷館の準訓導（訓導は藩校の教師）となります。その後は、大島沖に漂着した朝鮮人を尋問したり、福岡・秋月両藩で、君主に学問の講義をする侍講を勤めたりしました。一時期、罷免となったこともありましたが、その時は「著述を以て自ら娛しむ」（『福岡県誌』）、文政十三（一八三〇）年には、自分が見聞した福岡藩内のさまざまなエピソードを集めた『買櫝雑話』を著しています。その後は、再び修猷館で訓導を勤めました。老年に及び幾度か隠居願を出しますが、なかなか許されなかったことから、有能な人物だったことが分かります。祖父・父・周磐と、井土家の人々に教えを受けた藩士はかなりの数にのぼると思われます。星野や井土家のような、学問をもって藩を支えた人々も、この一帯には住んでいたのです。



8 昭和2年と同13年の宅地図による土地利用の変遷。ただし、昭和2年の方は同年に開通した城南線が書かれていないことから、大正期の調査を基にしている可能性が高い。淡色部分が低地、それを囲むように丘陵地がある。中央にある筑紫高等女学校は、現在の筑紫女学園中学校・高等学校。昭和2年と図7を比較すると、警固村に広がる田地がほぼ同じなのが分かる。昭和13年になっても丘陵地には住宅が少ないままだが、東側の丘陵の一部では住宅が増えている。これは城南線が開通したことの影響が大きいと思われる



7 明治33年測量の2万分の1地形図。北側の水色の部分は、福岡城の南の堀。丘陵の東側、現在の警固2丁目付近には田地(田)が残っている。図8の絵図と比較すると、田地の場所は近世からあまり変わっていない。また丘陵部分には笹林(竹)が広がっている。この周辺は、現在でも笹が多く見られる

● 昔と変わらぬ四十八溪

明治になると藩が廃止され、藩士は事実上、失業することになりました。この一帯に住んだ藩士たちの中にも、生活の糧を求めて他所へ居を移した者が多くいたようです。図6と明治後期の地図(図7)を比べると、警固村の田地は残っているものの、かつてあつたさまざまな施設や藩士の居住地は、大部分が笹林になっています。

明治三十四（一九〇一）年、この田地の一部に、筑紫女学園の前身である「福岡仏教中学」（明治三十三年に「崇信教校」より改称）が、瓦町（現在の博多区祇園町付近）から移転してきました。移転先となったこの場所は、広い土地があるだけでなく、町中まで歩いて行ける距離にあり、生徒たちの通学に便利な立地でした。さらに、周りは田や山林に囲まれ、喧嘩から離れていたため、教育の場として適していたのです。

その後、周辺の様子はどうなつていったのか、土地利用が分かる昭和二年(図8右)と昭和十三年(図8左)の二つの図から見えてみましょう。標高一〇メートルの地点に線を引いてみると、一〇メートルより低い部分(淡色部分)では、昭和二年の時点で住宅ができてることが分かります。学校の周辺、現在のけやき通りと城南線を繋ぐ新道(通称はなみずき通り)の一带は、この頃から宅地化



12



9

9 絵巻『桜峰地藏記』(部分)

10 『筑前国統風土記附録』収録の挿図「桜峰地藏堂」。左端の二つの建物に「甘露堂」「聖天堂」とある

11 現在の櫻ヶ峯神社。境内へは急な階段を上る

12 明治40年の筑紫高等女学校(現筑紫女学園中学・高等学校)の校舎と周辺の様子。手前に見える田地は、のちに筑紫女学園の敷地となった。校舎の奥には丘陵が見える。この写真と次頁の写真⑩は、ほぼ同じ場所を写したものである



11



10

が始まったようです。昭和十三年になると、残っていた田地はさらに減り、住宅地が拡大しています。

一方で、標高が一〇メートル以上の丘陵地では、平地ほどの変化が見られません。谷が入り組む複雑な地形が、宅地化を遅らせたのでしょうか。その後の高度経済成長を背景とした大規模開発も、この小高い一帯には及びませんでした。そのため、住宅やマンションなどがゆるやかに増えても、古い道や地形は大きく変わることはありませんでした。

● 「谷」から「峰」を仰ぐ

近代以降、平地に住宅や学校ができたことで、この一帯は現在の姿となりました。しかし、曲がりくねった路地や坂道がある丘陵地は、今も近世の面影を残したままです。最後に、丘の上にあつて往事の名残をとどめる「櫻ヶ峯神社」をご紹介します。

この神社について『筑前国統風土記附録』には「地藏堂 桜ヶ峰にあり。境内に天満宮石鳥居 基 稲 荷の小祠あり。守僧を桜峰山正元寺教泉坊と言。天台宗なり」とあり、当時は地藏堂だったことが記されています。同書には地藏堂付近を描いた挿図があり(図⑩)、詳しく見ていくと、山中に地藏堂、そこから下った谷あいには人里、人里から今度

は少し上って「甘露堂」「聖天堂」という二つの堂が見えます。このうち、聖天堂は昭和初期の地図でも確認でき、場所は現在の筑紫女学園の体育館付近に当たります。また、櫻ヶ峯神社には宝暦四(一七五四)年に作られた絵巻『桜峰地藏記』が残されており(図⑨)、台地に建つ地藏堂を人々が参拝する様子などが描かれています。

この二つに共通するのは、地藏堂がかなりの高所にあるかのように描かれていることです。ところが実際には、現在の櫻ヶ峯神社付近の標高は二〇メートル弱で、近世以降、造成などによる変化があったとしても、元々それほどの高さがあったとは思えません。しかし、神社から東のはなみずき通り付近の標高は、ぐっと下がって約三メートル、さらに聖天堂のあった筑紫女学園の体育館付近は再上昇して約一〇メートルと、直線距離にしてわずか三〇メートルほどの間で、急なアップダウンが続くこととなります。実際に歩いてみると標高以上に道のりは険しい印象で、近世の人々も同じように、地藏堂への道を険しく感じ、それが当時の絵に表れたのではないのでしょうか。

現在では、高いビルに覆い隠されていますが、この一帯は、平地の多い福岡の都心部にあつて、いくつもの「谷」を体感できる場所です。古い道を用意深く歩いてみると、歴史の痕跡がまだまだ見つかるかもしれません。



★表紙の写真撮影ポイント



① けやき通りから南の路地



② 野村望東尼誕生の地



③ 月形洗蔵居宅跡



④ ふくろうの森
(「弓射場」跡地周辺)



⑤ 福岡大学セミナーハウス前
(谷の低い部分)



⑥ 真光寺前
(丘慶と平地の境目)



⑦ 井土家居宅があった古大銀谷付近
(桜坂(西)交差点付近)



⑧ 加藤司書屋敷跡



⑨ 赤坂公園前
(栗林付近)



⑩ 筑紫女学園前
(はなみずき通り)

【参考文献】

猪野又太郎『櫻ヶ峰物語』（赤井図書出版、1997年）●学校法人筑紫女学園創立100周年記念誌編集事業委員会『筑紫女学園100年の歩みめぐり、出会い、100年。語り、つなぐ、未来。』（学校法人筑紫女学園、1997年）●川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『新訂 黒田家譜』第三巻（文献出版、1982年）●久住猛雄・宮元香織『筑前地方における首長墓系列の再検討』（『九州における首長墓系譜の再検討—第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集—九州前方後円墳研究会、2010年）●柴田勝『警固今昔物語』（警固今昔物語発行実行委員会・警固校区自治会連合会、2001年）●宮崎克則・福岡アーカイブ研究会編『古地図の中の福岡・博多』（海鳥社、2005年）●近藤義郎編『前方後円墳集成 補遺編』（山川出版社、2000年）●筑紫女学園百年史編集委員会『筑紫女学園百年史』（筑紫女学園、2009年）●福岡市教育委員会編『福岡市の板碑』（福岡市教育委員会、1992年）●福岡市教育委員会編『福岡市埋蔵文化財調査報告書第221集 博多—都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告V—』（福岡市教育委員会、1990年）●福岡市教育委員会編『福岡市埋蔵文化財年報 VOL.19 一平成16（2004）年度版—』（福岡市教育委員会、2006年）●福岡地方史研究会編『福岡藩分限帳集成』（海鳥社、1999年）

【協力】

赤坂校区自治連合会 ● 石瀧豊美氏 ● 学校法人 筑紫女学園 ● 警固神社 ● 中嶋楨吉氏

【資料所蔵】

学校法人 筑紫女学園 ▶ P6 ⑫ ● 個人蔵 ▶ P6 ⑨ (警固神社保管) ● P6 ⑩ ● 福岡県立図書館 ▶ P4 ⑥ ● 福岡市埋蔵文化財センター ▶ P3 ④ 左・P3 ⑤

【図版】

P3 ① / P5 ⑦ ▶ 1904年発行2万分の1地形図「福岡」[博多]（大日本帝国陸地測量部、「正式二万分一地形図集成[九州]」(柏書房、2001年)に所収)を基に加工
P5 ⑧ 右 ▶ 1927年発行 福岡市番地入実査図「第17 図 筑紫女学校付近一帯」[第18 図・第19 図 下警固福岡女学校付近及井原ヶ谷付近一帯]（春吉土地建物合名会社）を基に加工
P5 ⑨ 左 ▶ 1938年発行 福岡市縦横詳細地図「20 谷方面」[21 警固院方面]（銀洋社）を基に加工
P7 MAP ▶ (地図) 2014年調製 電子地形図2500「福岡」[福岡南部]（国土院）を基に作成
(地名) 1967年2月1日実施「警固六本松地区町界町名変更図」（福岡市）を参考に作成

【写真撮影】

市史編さん室 ▶ 表紙 / P2 / P3 ②・③・④・⑤ / P6 ⑨・⑩ / P7 MAP
福岡県立図書館 ▶ P6 ⑩

レポート 「日佐のなつかしMAP」をつくろう 「日佐さんぽ」ワークショップから

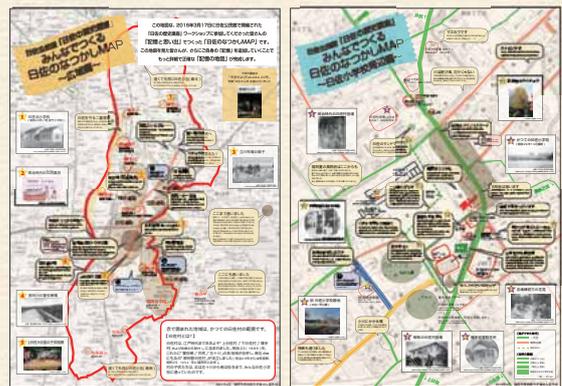
平成27年3月17日(火)、南区日佐公民館にて「日佐の歴史講座」(主催:日佐公民館)が開かれました。この講座は、編さん室スタッフが講師役を務め、本誌「市史だよりFukuoka」第20号の特集「日佐さんぽ」を基に、講義ではなく参加型ワークショップとして開催されました。



本誌の特集記事は、毎回古い資料を調べるだけでなく、直接現地を歩き、地元の皆さんのお話を伺っています。20号を作成する際にも、日佐へたびたびお邪魔しました。地元の皆さんから伺ったたくさんのお話を撃ぎ合わせていくと、資料を見るだけでは分からない、一昔前の日佐の様子が少しずつ明らかになり、紙幅に収まりきれないほどでした。

やはり地元のことは地元の皆さんが一番知っているもの。館長さんから講座の依頼を受けた時、まずその事を思い出しました。ならば、日佐の皆さんにもっと日佐の事を語ってもらおう! その情報を地図にした「日佐のなつかしMAP」を作れば、それが日佐の歴史を語り継ぐきっかけになるのでは? こうした経緯で、歴史講座のメインは、ワークショップ「日佐のなつかしMAPづくり」となりました。

当日は、平日にも関わらず約50名もの方々にお集まりいただきました。最初に編さん室スタッフが日佐の歴史について少しお話ししたあと、参加者の皆さんを6つの班に分け、大きな地図を広げて自由に思い出話をしていただきました。はじめは皆さん遠慮がちでしたが、そのうち誰かの一言が次の話を呼び、体験談から誰かの逸話、さらにはウワサ話や怪談話と、話が広がりはじめました。結局予定の時間を超過し、熱気に包まれた歴史講座は、大盛況のうちに幕を閉じました。



完成した「日佐のなつかしMAP」は日佐公民館で見ることができます

集まった思い出話の数々は、後日可能な限り地図に反映させ、日佐の皆さんによる「日佐のなつかしMAP」が完成しました。ご参加の皆さま、日佐公民館の皆さまには、この場を借りてお礼申し上げます。私たちも初の試みでしたが、大いに楽しんだ1日となりました。

ご案内 第11回 福岡市史講演会を開催します 「福岡の戦後70年～文化・スポーツ・まちづくり～」

開催日時	平成27年11月28日(土) 午後1時30分～4時30分(予定)
会場	福岡市博物館 1階 講堂(福岡市早良区百道浜3-1-1) ※ 入場無料・事前申し込み不要/先着定員230名
内容	戦後70年の節目の年にあたり、「文化」「スポーツ」という視点から、福岡という街の戦後の歩みを振り返る講演会です。
演題と講師	<p>文化 「戦後占領期の福岡における雑誌出版」 講 演: 石川 巧(立教大学文学部 教授/福岡市史編集委員会近現代専門部会専門委員)</p> <p>スポーツ 「スポーツとまちづくり」 基調報告: 千代島 隆利(元 福岡市職員) 対 談: 千代島 隆利・山田 克己(元 福岡市職員)・有馬 学(福岡市史編集委員会委員長/福岡市博物館長)</p>
お問い合わせ	福岡市博物館 市史編さん室 〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-1-1 ☎092(845)5245

○ 考古

先頃、地下鉄延伸工事に伴う発掘調査によって、博多遺跡群の弥生時代から江戸時代に至る遺構・遺物が見つかり、話題になりました。博多遺跡群は、一九七七年からこれまでに二〇三次にも及ぶ調査が行われています。中世の商業都市・博多の姿を現在に伝える遺跡として広く知られていますが、中世に限らず各時代の遺構が残る複合遺跡として、貴重な存在といえるでしょう。

平成三十二年刊行予定の『資料編 考古2』では、最新の調査の成果をできる限りふまえて、博多遺跡群についてもご紹介する予定です。

○ 近世

『資料編 近世3』には町と寺社の史料を掲載する予定ですが、昭和二十年の福岡大空襲により、福岡・博多両町の史料は、その多くが失われました。現在残されているものの中で、福岡・博多の町を明らかにでき、掲載するのに適当な史料は何だろうか、寺社の史料との兼ね合いも考えながら、これまで議論を重ねて来ました。

当初は掲載できる史料が集まるのか不安でしたが、徐々に史料が集まり、現在では一転して、一冊に収めるために取捨しなければならぬ状況になりました。今度は贅沢な悩みを抱えることになりましたが、福岡・博多のイロイロが詰まった一冊をお届けできるよう、編集を続けていきます。

○ 古代

『資料編 古代』には、古代の筑紫に関わる文献資料の一つとして、和歌や漢詩などの文芸資料も収録します。筑紫で詠まれたもの、筑紫を詠んだものなど、数多くの歌や詩が残されており、収集を続けています。

古代の福岡地域の風景が読み込まれたものあり、今でも共感できる人々の心情が綴られたものありと、文芸資料には、古代と現代の距離を一気に縮めてくれる魅力があります。思わず収集作業の手を休め、古代の人々の生活に思いをはせてしまうこともたびたびです。

○ 近現代

これまで『近代福岡の印刷と出版(仮)』(平成二十九年刊行予定)としてご案内していた特別編の巻名が、「活字メディアの時代―近代福岡の印刷と出版―」に決まりました。オールカラーで、写真や図版をふんだんに盛り込んだ本として、現在編集作業を続けています。

太平洋戦争によって日本の製紙出版業も大打撃を受けますが、戦後の福岡は比較的早期に出版事業を回復させました。また戦前の文化的蓄積もあって、地元出版社により、中央に遜色のない出版文化を築きます。特別編では、このような地方文化の担い手としての印刷出版についてクローズアップします。

○ 中世

『資料編 中世3』に収録予定の資料に「蒙古襲来絵詞」があります。有名な絵巻物であり、教科書などで目にした方も多いと思いますが、今回取り上げるのは絵の部分ではなく、絵巻の内容の説明文である「詞書」です。絵の部分はご存じの方も、詞書に注目する機会は少ないのではないのでしょうか。

『資料編 中世3』には、この詞書の全文を掲載する予定です。じっくり読んでみると、絵の部分を見るだけでは思いもよらなかったことが浮かび上がってくるかもしれませんよ。

○ 民俗

福岡市の八月下旬の日入は午後七時前後。この時間帯、市内各所はどんな様子でしょうか。静かな住宅街では人通りもまばらな頃、オフィス街では窓明かりの下を終業後の人々が通り過ぎる頃、一方、天神のような繁華街ではまだ客足の多い頃でしょう。その天神も、午後八時を過ぎれば百貨店が閉店し始めて雰囲気が変わってきます。しかし中洲などの歓楽街ではそこらが本番です。

では、市内でも農業漁業のさかんな地域ではどうでしょうか？ 駅、空港、港湾では？

『民俗編 三夜と朝』では、多彩な顔を持つ市内の夜と朝を、さまざまな角度から描き出します。

新修 福岡市史

ナナメ読み

その1 資料編 近現代1

時刻を「ドン」と知らせます — 福岡の号砲

日本の標準時は、東経一三五度の子午線上での時刻です。兵庫県明石市が「標準時のまち」「子午線のまち」として有名ですね。世界中の経度と時刻の基点が、イギリスのグリニッジ天文台を通る子午線に決定したのは一八八四年。日本の標準時が東経一三五度の時刻に定められたのは明治十九（一八八六）年のことです。日本中が、一つの標準時で正しい時刻を使うようになってから、まだ一三〇年ほどなのです。

正しい時刻を知らせるための時報の例



明治36年から昭和6（1931）年まで使用されていた午砲【福岡市博物館蔵、常設展示室にて展示中】

として、旧版『福岡市史』第一巻（昭和三十四年発行）では、明治二十一年七月二十二日から、私立号砲会社が時刻を知らせる号砲を発射するようになった、という話を『九州日報』（大正五〜一九一六年九月十一日）などを引用しながら紹介しています（九八七〜九九〇頁）。この話は、本誌「市史だより F u k u o k a」第一号（平成二十三年八月三十一日発行）の「歴史万華鏡」でもご紹介しましたし、『新修福岡市史 民俗編 春夏秋冬・起居往来』（平成二十四年発行）では、住吉神社（中央区港三丁目）の項で境内の午砲場跡説明碑を紹介しています（九八五〜九八七頁）。福岡で、時刻を知らせる号砲といえば、これらの新聞記事や記念碑などで知られている正午を知らせていた午砲「ドン」のことでした。

ところが、これよりだいぶ早い明治四

今回のナナメ読みは



A5判 上製本（函入り）920頁
頒価 5,000円（税込）

年、福岡の人々に時刻を知らせるために号砲が撃たれていたという記録が、『新修福岡市史 資料編 近現代1 維新見聞記』（平成二十四年発行）に収録されています。幕末維新期の福岡の商人が、さまざまな伝手で収集した情報を年ごとにとめて書き綴った『維新雑誌』という記録の、明治四年の巻に、明治四年十月から翌五年二月まで、正午を知らせる午砲と、県庁への出仕の合図として朝五つ時（午前八時頃）と正午に号砲を撃っていたことが記されているのです（五九四頁）。『維新雑誌』の号砲に関する記述は短いものなので、どこで誰が号砲を撃っていたのか、なぜ廃止されたのかなど、分からないことだらけですが、今後もつづく市史編さんのための調査のなかで、何か新しいことが分かると楽しいなあ、と思っています。

電話申込み・店頭販売

- ▷ 福岡市博物館 ミュージアムショップ（福岡市早良区百道浜3丁目1-1）☎092-823-2800

お問い合わせ先

- ▷ 福岡市博物館 市史編さん室（福岡市早良区百道浜3丁目1-1）☎092-845-5245

店頭販売

- ▷ 福岡市情報プラザ（福岡市中央区天神1-8-1 福岡市役所1階）☎092-733-5333
- ▷ ジュンク堂書店 福岡店（福岡市中央区天神1-10-13）☎092-738-3322
- ▷ 黒木書店 六本松店（福岡市中央区梅光園1-1-14）☎092-716-3566
- ▷ 黒木書店 長住店（福岡市城南区西長住2-25-28）☎092-562-1052
- ▷ 黒木書店 七隈店（福岡市城南区七隈8-12-16）☎092-871-2329



タイムマシンで となりの駅へ

— 近過去への旅 —

文 = 有馬 学 (福岡市史編集委員会委員長 / 福岡市博物館長)

絵 = 新田 岳 (cubicface)

text_Manabu ARIMA, illustration_Takeshi NITTA

第 1 回

同時代史の歩き方

今年には戦後70年なのだそうです。日本近代史を研究して福岡市史にかかわる者として、それなりの挨拶をしるといふ無言の圧力を感じます。そこで、これから何回か、現在と地続きの、近い過去に向けられるべきまなざしについて考えてみることにします。

まず単純に、70年という時間的な距離を考えてみましょう。たとえば、先の大戦以前の日本人にとって、日本が戦った戦争といえば、第一に思い浮かぶのは日露戦争だったでしょう。では、日露戦争の戦後70年って、何があった年ですか？ 日露戦争の講和条約が結ばれた1905 (明治38) 年から70年後の1975 (昭和50) 年は、福岡市にとっては新幹線が博多まで開通した年です。

70年という物差しは、いま日本の敗戦から今日までの距離を指していますが、少しずつ、日露戦争から山陽新幹線全通までの距離と重なります。70年という時間的な距離は、現にまだ活動をしている人間の人生と同じ程度の距離にすぎません。その人間 (実は私のことです) にとって、戦後70年は完全な同時代史です。でも、開通したての新幹線に乗ろうと博多駅のホームに立っている若い人に、日露戦争を同時代の出来事だと思えというのは無理な相談でしょう。

70年は、ある人間にとっては同時代でも、ある人間にとっては、自分自身の価値観や常識が通じない、歴史の彼方です。彼にとってそれは、すでに「過去という外国」の領域に入っているのです。彼には異文化としての「過去という外国」を歩く、『地球の歩き方』が必要かもしれません。同じように私にも、自分の同時代について、現在の常識が通じない歴史的過去としてとらえる謙虚さが必要なのでしょう。近過去への旅は、まだ持ち合わせていない「同時代史の歩き方」を探す旅でもあるのです。

これまで各自治体により、さまざまな形で自治体史の編さんが行われてきました。地道な作業ではありますが、これらが、日本史研究の進展に大きく寄与してきたことも確かです。

福岡市の場合、市史編さんは大正年間からその芽が出ていたものの、なかなか本格的な編さん事業を開始できずにいました。早い段階で市役所内外からのアプローチはあったようですが、どれもなかなか実を結ばなかったのです。結果的に、現在編さんしている『新修 福岡市史』は、国内主要都市の中では、最後尾のスタートとなりました。

時代が「昭和」から「平成」へと移り、昭和34(1959)年から刊行が始まった、市制施行(明治22(1889)年)以降を対象とする行政資料中心の『福岡市史』の編集作業が、平成9(1997)年度をもって終了することになりました。しかしその時点では、その後の市史編さん事業をどうするかという方針は、まだ決まっていませんでした。そこで、以降の編さん事業についての協議が、市役所内部で始まり、また仄聞するところでは、同じ頃、大学関係者や研究者が、本格的な自治体史の必要性について、各所で発言していたそうです。ただ、市史編さんに関する協議や発言が活発になってきたものの、市役所トップが新たに本格的な市史編さん事業の開始を決断するには、今ひとつといった状況だったようです。もうひとつ押し、何かが必要だったのです。筆者が体験したその「ひとつ押し」をお話ししましょう。

平成10年11月6日に開催された「福岡市文化賞」の表彰式と、それに続く祝宴でのことです。福岡市は、市民文化醸成を目的として「福岡市文化賞」を設け、昭和51年度から文学・芸術・美術・音楽など、創造性に富む市民を毎年顕彰しています。筆者も、博物館関係の市民活動について状況を聴取されるようになっていましたので、これ幸いと声を大にして市民の文化活動を報告していました。表彰式にも駆けつけ、祝言を述べ、喜びを一にしていたのです。この席上、武野要子教育委員(当時)が、筆者を桑原敬一市長(当時)の側に呼び寄せ、研究者も応援するから本格的な自治体史の編さんを始めるようにとの趣旨で、市長に懇請されました。郷土史家の受賞者もいたため、彼らも加わって市長陳情のごとき様相を呈しましたが、文化事業の場ということもあってか、市長は『福岡市史』の区切りがいつたら、本格的な市史編さんを始めようと約束され、二重の喜びに沸いた一コマでした。居合わせた筆者は、事のなりゆきをただ感激して見ていたことを思い出します。『福岡市史』の編集作業終了後、市史編さんの予算は大幅に減額されていましたが、本格的な市史編さんに向け、事業は継続していくこととなりました。

個性ある自治体であろうとするならば、将来への展望を考えるうえで、過去を振り返る必要があるでしょう。そのとき、自治体史の存在は、大きな助けとなるはずで

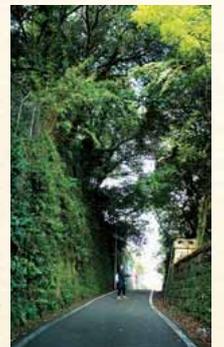
●お詫び● 「市史だより Fukuoka 20」に掲載の「お知らせ」に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

P6 お知らせ「新修 福岡市史 資料編 近世2」刊行記念講演会講師【誤】岩崎義則先生(福岡市博物館) ▶【正】岩崎義則先生(九州大学大学院准教授)

表紙の写真 「近世」を繋ぐ「近代」[中央区桜坂2丁目]



表紙の撮影場所(P7「歩いてみようMAP」★印付近)を、『福岡御城下絵図』(P4図⑥)で探してみると、田地から丘陵へ向かう道は現在とあまり変わりませんが(紫色実線)、途中から形が違おうようです。絵図では、北に大きく曲がって「弓射場」に向かい、現在とは違う場所で南北方向の道に繋がっています(緑色実線)。南北の道も現在までほぼ変わっていないので(紫色実線)、これらから推測すると、撮影場所は山の中……? そうです、表紙の道は、山を切り開き、近代になって通した道なのです(白色破線)。するとこの場所は、いわば「近世」と「近世」を繋いでいる「近代」ということですね。実際に現地へ行くと、道の両側は高い石垣、その上には木々がうっそうと茂り、かつては山の中だった様子を思い浮かべることができます。特集の最後に「歩いてみようMAP」を掲載しました。本誌を片手に、このような歴史の痕跡を探して「四十八溪」を歩いてみてはいかがでしょうか。



本誌は今号から紙面をリニューアルしました。なんとページ増、さらに待望の有馬委員長によるコラムがスタート! 『新修 福岡市史』の内容や市史編さん室の様子など、市史のあれこれを、これまで以上に皆さまにお伝えしていきます。

福岡市史についての最新情報はこちらから。「市史だより Fukuoka」のバックナンバーも見られます!

福岡市史ホームページ ▶ <http://www.city.fukuoka.lg.jp/shishi/>

福岡市博物館の情報はこちらから。10月からは有馬委員長(館長)のブログもスタート!

福岡市博物館ホームページ ▶ <http://museum.city.fukuoka.jp/>

Printed in Japan.

Copyright by Fukuoka City Museum

本誌掲載の写真・図版・記事などの無断複写・転載を禁じます。